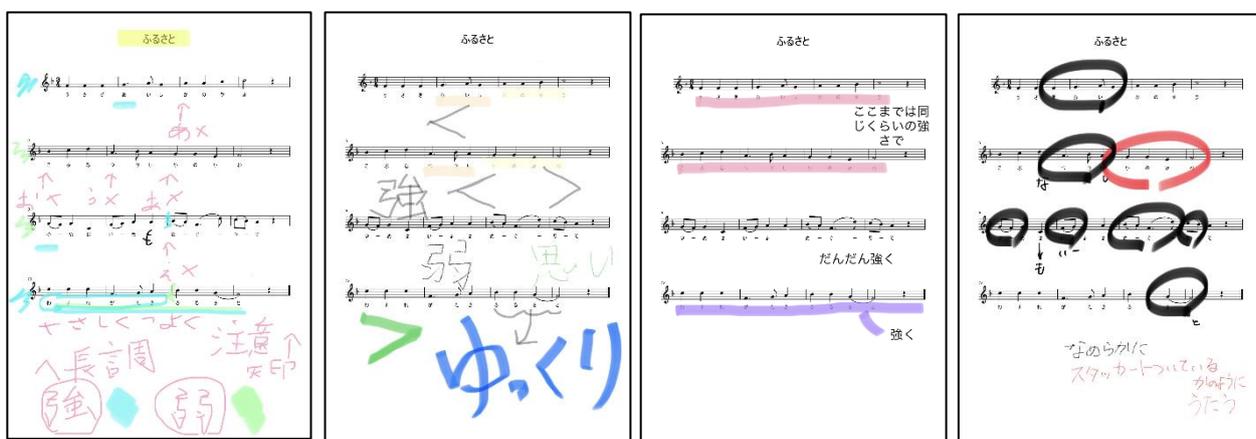


1 授業の実際

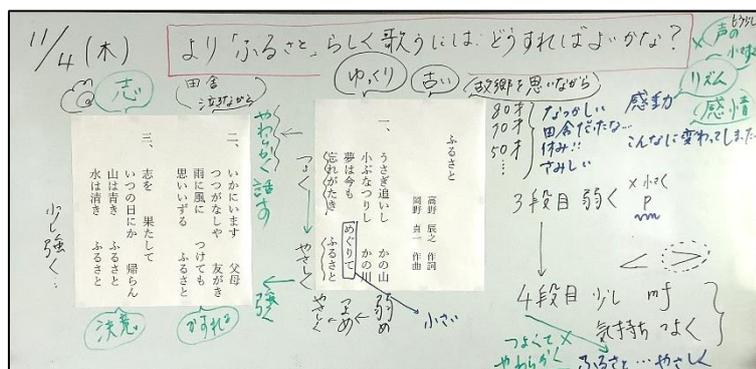
本題材の「ふるさと」は、作られた時代と現在の環境や生活様式は異なるが、作曲者や作詞者が込めた思いを音楽の構造や歌詞の内容から想像しやすい曲です。子どもたちが仲間と歌唱活動に取り組む中で、生き生きとした感じ・やわらかい感じといった「ふるさと」から感じた自己のイメージや感情を音色の働きと関連付けることを大切にしたいと考え、本実践を行いました。

【第1時】

まず、曲名を提示し、「ふるさと」のイメージを共有しました。右の板書写真のとおり、「田舎」「学校」「秋」などといった考えがありました。そのイメージをもとに、『ふるさと』の1番をどのように歌うか考えていくと、「優しく」「なめらかに」といった音色に近い記述も見られましたが。これまでの学習を踏まえて、強弱を用いて歌い方について考える様子が見られました。



【第2時（本時）】



本時では、1番の歌い方と比較しながら、2番や3番の歌い方を考えていきました。作詞者の思いを想像しながら、歌い方を考えていくと、「1番よりも柔らかく」「少し悲しい感じ」といった音色の発言が見られました。しかしながら、子どもたちが歌い方の工夫

で取り上げやすいのは強弱であることや、音色を表す言葉の引き出しも少ないことから、強弱以外の要素に目を向けることができなかつた子どももいました。歌い方を考えたあとは、「ふるさと」を通して歌い、感じたことから再度歌い方考えることを繰り返し、「ふるさと」らしい歌い方を求めて取り組んでいきました。

2 今後に向けて

今回の実践から、音色に着目するのは難しく、子どもたちが歌い方で工夫しやすいと考えられる強弱に着目することとなってしまいました。強弱に着目することに留まるのではなく、込められた思いと旋律を関連付けながら音色を自在に変化させることができるよう、様々な題材で経験を積み重ねていきたいと考えています。